国立国語研究所学術情報リポジトリ

Examination of an active accentuation rule in the Tokyo dialect

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-06-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 相澤, 正夫, AIZAWA, Masao
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001341

国立国語研究所報告 103　研究報告集12（1991）

生きているアクセント規則の検討

－東京語の単純動詞とその転成名詞の場合－

相澤　正夫

AIZAWA Masao : Examination of an Active Accentuation Rule in the Tokyo Dialect

要旨：東京語で，起伏式アクセントをもつ単純動詞から派生された転成名詞は，原則として起伏式アクセントを保持する。このアクセント規則を，今日生きている規則と呼んでその有用性を唱える説に対し，いくつかの問題点を指摘して検討を加えた。まず，生きている規則と呼ぶための要件として，この派生パターンの生産力の高さを問題にすべきことを論じた。次に，既成の転成名詞でこの規則が守られているかどうか，社会言語学的な観点から変異の実態を把握し，そこに関与している諸要因の分析を行った。対象データは，『東京語アクセント資料　上・下』から採集した。

キーワード：東京アクセント，アクセント規則，動詞からの転成名詞，起伏式動詞，平板式動詞，『東京語アクセント資料　上・下』

Abstract : In the Tokyo dialect there is an accentuation rule that nouns converted from simple verbs with falling pitch accent have the same accent pattern. One opinion views this rule as an active rule and therefore very valuable one. The objective of this paper is to point out some theoretical flaws in that opinion and to examine the related problems. Firstly, I consider that the conversion pattern mentioned above would be sufficiently productive were the rule simply called "active". Secondly, I propose a good deal of sociolinguistic data to examine how the said rule is observed in the case of nouns that have long since been converted from simple-verbs. I also make a tentative analysis of the factors that seem to have brought about the actual state of variety. The data was obtained from "A Dictionary of Tone-accent on Words in the Tokyo Dialect. Ⅰ, Ⅱ".

Key words : accentuation in the Tokyo dialect, accentuation rule, verb-converted noun, falling pitch verb (accented verb), even pitch verb (unaccented verb), "A Dictionary of Tone-accent on Words in the Tokyo Dialect. Ⅰ, Ⅱ"

1．はじめに

われわれがある言語単位に適切なアクセントを与える方法には，次の二つの典型的なタイプがある。一つは，伝承されたアクセントをそのまま再現する場合であり，もう一つは，一般性の高いアクセント規則を適用して，その単位にふさわしいアクセントをそのつど導き出す場合である。前者を「伝承的アクセント」，後者を「規則的アクセント」と呼ぶことにする。

単語アクセントの習得という点からみると，伝承的アクセントは，個々の単語のアクセントを周囲から伝承されるままに，まるごと習得する場合である。例えば，「鳥，川，山，舟，雨，買う，飼う」など，日常よく使われる基礎的な単語のアクセントは，個々の単語について社会習慣的に決まっている固有の特徴として，ひとつずつ覚えなければならない。

一方，規則的アクセントは，ある単語の伝承されたアクセントを土台に，さらに一般的な規則を適用して，別の単語のアクセントを導く場合である。ここで習得すべきは，その単語（あるいは形態素）に対してどういう規則が適用されるかという情報である。例として，東京語の「トリ（鳥)」を後部成素とする複合名詞のアクセントを取りあげてみよう。

(1-a) 千鳥，山鳥，海鳥，むく鳥，雛鳥，都鳥，渡り鳥，風見鶏，閑古鳥，春告鳥，…

(1-a)の語群で「～鳥」のアクセントは，前部成素「～」の最後の拍から次の「鳥（ドリ)」にかけて音調の下降を示す。一般に「鳥」という語が複合名詞の後部成素になるときは，「前部成素の音調を平板化し，自らの直前に下降をおく」という規則が適用される。したがって，例えば「ギーギー」と鳴く目新しい鳥に対して，臨時に「ギーギー鳥」と名付けるときでも，アクセント付与には支障が生じない。但し，少数の例外はある。

(1-b) 小鳥，大鳥，水鳥，鶏，雄鳥，雌鳥，焼き鳥，…。

(1-b)の語群では，(1-a)の語群のような音調の下降がみられない。強いて(1-a)のような音調の下降を付けると，東京語としては不可となる。これらの単語については，下降を伴わない音調を伝承的アクセントとしてまるごと習

得し再現する必要がある。但し，少数であるから，記憶の負担は軽い。

上述の規則が例外なく適用される典型的な例は，地名に「シ（市）」という後部成素が付加される場合であろう。

(2-a) 津市，千葉市，秋田市，金沢市，宇都宮市，東久留米市，東村山市，サンフランシスコ市，フランクフルトアムマイン市，…

(2-b) 例外なし。

「～市」の「～」に現れうる地名は，架空のものも含めれば事実上無限と言ってよい。しかし，「～市」全体のアクセントは，「～」の部分がどうあれ一律に決まる。全ての場合に「前部成素の音調を平板化し，自らの直前に下降をおく」という規則で対応できる。

このように複合語の場合，一般に，後部成素の生産力（productivity）が高ければ，規則的アクセントの徹底性もそれに比例して高くなる。これをアクセント規則が「生きている」ことの典型例とみる。このように，規則的アクセントにとって，規則が生きて働く場が与えられているかどうかは重要なポイントである。[注1)]

生きているアクセント規則には，アクセント習得上の負担を軽減するという効用が認められるが，さらに，その言語自体に内在する規則性を表示し補強する機能があるという点も無視できない。特に，アクセントが文法と関わる領域では，重要な役割を果たしているとみられるからである。

例えば，動詞に使役の「セル・サセル」，受身の「レル・ラレル」が後続するとき，全体のアクセントがどのように決まるかをみよう。

(3-a) カウ　（買う）　→　カワセル　　→　カワセラレル

(3-b) カ’ウ（飼う）　→　カワセ’ル　→　カワセラレ’ル

「’」は音調の下降を表わす。「買う」と「飼う」はいわゆる同音語であるが，「’」の有無で区別される。そして，この区別は使役形，受身形にも引き継がれ保持される。(3-a)の系列と(3-b)の系列とは，決して交差することがない。伝統的用語では，この(3-a)の系列を「平板式」，(3-b)の系列を「起伏式」と呼ぶ。ちなみに，ここで伝承的アクセントとして習得されるべきこと

は，単語として「飼う」には「’」があり，「買う」にはそれがないという点である。

東京語の動詞アクセントは，平板式と起伏式とに二分されるが，起伏式動詞の「’」の位置は，例えば終止形の場合，全て最終拍の直前に来るのが原則である。上の例からも分かるように，使役形，受身形へと形態変化させてもこの原則は守られる。

このように，アクセントに関して，個々の動詞に固有の平板式あるいは起伏式という特徴が，形態変化などの過程でも引き継がれる現象を，本稿では「式の保持」あるいは「式を保持する」と表現することにする。式の保持も，広い意味で，生きているアクセント規則の一つである。[注2)]

上の場合は典型的な例であるが，式の保持は，動詞から名詞を派生させる場合にも観察される。次にその一例を示す。

(4-a) 着方，買い方，遊び方，働き方，…

(4-b) 来方，飼い方，泳ぎ方，喜び方，…

「～方」という派生接尾辞によって，「～する方法」「～するさま」を意味する名詞をつくることは，日常さかんに行われる。「～方」は，きわめて生産力の高い派生パターンである。[注3)] ここでのアクセント付与は，もとの動詞の式を保持する形で行われる。(4-a)が平板式の系列，(4-b)が起伏式の系列である。但し，実際のアクセントを導く際には，「前部成素となる動詞の式を派生語全体として保持する」という規則のほかに，「起伏式のときは，尾高型になる」という二次的な規則がさらに適用される。[注4)] 派生語が名詞のカテゴリーに属するために，式より下位の，型のレベルの区別が要求されるからである。

(5-a) キカタ　，カイカタ　，アソビカタ　，ハタラキカタ　，…

(5-b) キカタ’，カイカタ’，オヨギカタ’，ヨロコビカタ’，…

このように，この派生パターンに関わるアクセント規則も，生きているとみなすことができよう。[注5)]

さて，本稿で以下に扱おうとする動詞からの転成名詞も，動詞から名詞を

派生させる場合の一つである。但し，これは，いわゆる接尾辞ゼロの派生である点に特徴がある。この派生パターンもある程度の生産力をもつと予想されるが，それに伴うアクセント規則の実際のあり方はどうなっているのか，調査データにもとづきながら、詳細に検討を加えることにしたい。

2．動詞からの転成名詞にみられるアクセントの規則性

動詞から転成名詞をつくるときのアクセントについて，川上蓁（1973）は次のようにその規則性をまとめた上で，これを「今日生きている規則」と呼び，その有用性を説いている。

起伏式の　単純動詞からの　転成名詞は　尾高型である。(a)
起伏式の　複合動詞からの　転成名詞は　平板型である。(b)
平板式の　単純動詞からの　転成名詞は　平板型である。(c)
平板式の　複合動詞からの　転成名詞は　平板型である。(d)

これはまた，さらに次のようにもまとめられるという。

平板式動詞からの　転成名詞は　平板型である。(c+d)
複合動詞からの　転成名詞は　平板型である。(b+d)
起伏式単純動詞からの　転成名詞は　尾高型である。(a)

但し，ここでの用語は，単純動詞とは，複合動詞と意識されない動詞のこと，複合動詞とは，動詞どうしの複合した動詞のことである。あらかじめ，この点には注意が必要である。

それぞれについて，同論文に示された例を次に引いておく。（第1章では「’」を音調の下降という具体的な特徴を表わす記号として用いたが，以下では，議論に支障がないかぎり，より抽象的な「下げ核」の意味で用いる。また，「・」で適宜複合語の切れ目を示す。）

(a)　起伏式単純動詞　→　転成名詞（尾高型）
ワカレ’ル　→　ワカレ’
オヨ’グ　→　オヨギ’
ヨ’ム　→　ヨミ’

(b) 起伏式複合動詞 → 転成名詞（平板型）

ウタイ・ダ’ス → ウタイダシ

カリ・イレ’ル → カリイレ

ウリ・ダ’ス → ウリダシ

シ・イレ’ル → シイレ

(c) 平板式単純動詞 → 転成名詞（平板型）

オコナウ → オコナイ

アワテル → アワテ

オワル → オワリ

カリル → カリ

カス → カシ

ネル → ネ

(d) 平板式複合動詞 → 転成名詞（平板型）

オヨギ・ダス → オヨギダシ

ナゲ・イレル → ナゲイレ

ナゲ・コム → ナゲコミ

なお，(d) の類の複合動詞は，若い人は起伏式に言うことが非常に多く，この傾向が，さらに中年層や老年層の一部にも及んでいる，という観察も付記されている。

動詞のアクセントと転成名詞のアクセントとの関係について，川上論文が規則としてまとめるところは，さらに単純化して，次のように表現することができる。

(A) 起伏式単純動詞からの転成名詞は尾高型である。(a)

(B) (A)以外の動詞からの転成名詞は平板型である。(b+c+d)

すなわち，(A)の「起伏式動詞の場合，それが単純動詞のときにかぎり式の保持が行われ，転成名詞は尾高型となる」という点がこの規則のポイントである。

その動詞が単純動詞かどうかは，「複合動詞と意識されない」という点を

確認すればよい。結局，動詞からの転成名詞のアクセントを正しく導くために必要な情報は，「単純動詞の場合の起伏式」という点に尽きる。要は，それを伝承的アクセントとして正確に習得していることである。

このように，単純動詞のアクセントの式，とりわけ起伏式という情報は，転成名詞アクセント規則の適用において重要な意味をもつ。言い換えれば，単純動詞において，「下げ核」という有標の標識をもつ語群だけが，転成名詞においてもそれを保持し，アクセント的に有標の系列をなすとみることができる。

これに対して，平板式という情報は，式の保持において積極的な意味をもつとは言いがたい。「下げ核」をもたない，つまり，無標という消極的な資格で，有標である起伏式と対立するにすぎないからである。言い換えれば，平板式というのは，ある語が何らかの理由で「下げ核」を失い，起伏式たる資格を失ったときに，いわば自動的におちつく先ということである。

起伏式アクセントには，さらに下位区分としての型がある。単語の拍数に応じて，例えば，頭高型，中高型，尾高型などと，必要に応じて呼び分けている。これにならって，平板式についても平板型という呼び名で，あたかも型のレベルが存在するかのように言う習慣があるが，これは実はあまり意味のあることではない。

名詞のアクセントについて，しばしば「尾高型から平板型に変化する」などという表現を使うが，ここで実際に起っている変化の本質は，「語末に下げ核をもつ型（尾高型）が，下げ核を失うことによって，型の区別を必要としない式（平板式）に変化する」ということである。つまり，下げ核（有標の標識）を失うことによって，型の領域から解放されるわけである。

さて，以上のように，動詞からの転成名詞にみられるアクセントの規則性を捉えた上で，川上（1973）のいう「今日生きている規則」という点と「有用さには限りがない」という点を、あわせて少しばかり検討してみよう。

川上論文がこのアクセント規則について上のように説く理由は，「今日の人が必要に応じて任意の動詞から名詞を転成するときに働くのがこの規則で

ある」という一文に集約されていると思われる。[注6)]

確かに，このアクセント規則それ自体が，川上論文のいう意味で今日生きていることに問題はなさそうである。しかし，現実的な問題としては，この転成名詞派生パターンが，はたして今日どの程度の生産力をもっているのか，という点を無視することができない。「必要に応じて任意の動詞から名詞を転成する」という局面が一体どのくらい現実に存在するのか。この点が把捉されないと，十分な根拠をもって今日生きている規則とは言いにくいのではないか。[注7)]

このように転成名詞が新規に創造されうる可能性も含めて，この派生パターンのもつ生産力を，何らかの量的なスケールの中に位置付けることができれば，造語研究の面にも資するところが大きいと思われる。このアクセント規則の有用性も，その時点でより客観的に評価できるであろう。ただ，この問題は，ここでは詳細に論ずる用意がなく，今後の研究課題として示唆するに止める。

さて，実際に使われている転成名詞には，この派生パターンによってすでに転成されてしまった，いわば既成品としての転成名詞も多いはずである。それらも派生時には，この規則にしたがってアクセント付与がなされたと推定されるが，今日のアクセントは，はたして規則どおりの型がそのまま伝承されているのであろうか。この点に関して，豊富な調査データを使って検討を加えておくことは，語彙化（lexicalization）とアクセント規則適用との相関関係をみるうえでも、十分に意義のあることと思われる。

3．検討対象とするデータの収集

3.1.　『東京語アクセント資料』

動詞からの転成名詞のアクセントが，実際にどのくらい前章でみたような規則性を示すのか，その検討対象とするデータを『東京語アクセント資料上･下』（以下『東京ア』と略称）から採集することにした。

『東京ア』のもとになった調査の概要，その基本的性格などについては，

『東京ア』のまえがき，馬瀬良雄・佐藤亮一（1989），佐藤亮一（1990）に詳しいのでそちらに譲るとして，ここでは本稿の論述にとって重要な点についてのみ触れることにする。

『東京ア』本体の特徴は，次のとおりである。

(1) 現代東京語でアクセントのゆれが予想される12,803語を収録。

(2) 年齢差，地域差（山の手と下町），男女差を考慮して選定した19名のインフォーマントについて、個人別に記載。

(3) 既刊の辞書4種に記載されているアクセント型と対照。

(4) 準備段階でアクセントをチェックした2名のアクセントを併載。

(1)については，大量の語の中から採集できるという点で有利であるが，それが「アクセントのゆれが予想される12,803語」であるという点には十分な配慮を必要とする。佐藤（1990）はこの点を指摘し，「われわれが調査語として選ばなかった語（非日常語として削除した語を除く）は，現代東京語で単一のアクセント型を使用する傾向の大きいことが予想されるものだということになる」という慎重な記述を付け加えている。[注8)]

(2)については，インフォーマントの属性による違いをみることができる点で有利であるが，三つの属性が相互に独立した変数として扱えるような理想的なインフォーマント選定にはなっていないので，属性差の解釈には注意が必要である。[注9)]

19名のインフォーマントの属性は次のとおりである。ローマ字がインフォーマントを表し，大文字は男性，小文字は女性を示す。「山」と「下」で，山の手出身，下町出身の別を表す。二桁の数字は，西暦で生年の下二桁である。なお，調査は1982年から1984年にかけて実施された。

A下62，b山59，C下58，d山58，E下53，F下50，g下47，H山43，i下43，J山39，K下39，l山35，m山35，N山30，o山30，P下29，q山29，r山20，s山11

(3)については，既刊の辞書に記載されるアクセントが，どのように現代東京語アクセントの現実を捉えているかをみるのに便利である。4種の辞書と

その略称は，次のとおりである。

『新明解』：『新明解国語辞典』（第３版）

『ＮＨＫ』：『日本語発音アクセント辞典』

『明解ア』：『明解日本語アクセント辞典』（第２版）

『全国ア』：『全国アクセント辞典』

(4)は，いわば試掘的な調査の結果を参考データとして記載したものであるが，最終的にこの試掘が妥当であったかどうか，調査法を検討する際に必要な情報である。２名の属性は次のとおりである。

Ｘ山55，ｙ下20

なお，(3) (4)の情報は，語によっては欠けているものがある。

(2)〜(4)の情報は，『東京ア』の本体では，次のような配列で提示されている。また，アクセントの型は，『新明解』に準拠して数字で示されている。本稿でも，アクセント情報を提示する際は，原則としてこの配列順に従うことにする。

新	Ｎ明全	Ｘｙ	ＡｂＣｄＥＦｇＨｉＪＫｌｍＮｏＰｑｒｓ
明	Ｈ解国	山下	下山下山下下下山下山下山山山山下山山山
解	Ｋアア	5520	6259585853504743433939353530302929201 1

3.2.『東京ア』からの転成名詞の採集

転成名詞の採集方針として，『東京ア』から，語形的に動詞との対応付けが可能な名詞を，比較的ゆるい基準でもれなく抜き出すことにした。但し，相手の動詞が，川上蓁（1973）にいう複合動詞（つまり動詞どうしが複合した動詞）の場合は除外し，単純動詞の場合のみを対象とすることにした。単純動詞に限定したのは，第２章で述べたように，その起伏式アクセントの場合を特に問題にする必要があると考えるからである。

転成名詞アクセント規則の適用にとって重要なことは，共時的な意識において，動詞と名詞との間に対応関係が確立されているかどうかという点であろう。「サゲスミ（蔑み）」と「サゲスム」のように，歴史的には名詞から動

詞の方が派生されたとみられる例もあるが，これは除外しないことにした。また，「ハバタキ（羽ばたき）」のように，動詞「ハバタク」との対応関係は確立されているが単純動詞とは言いがたい例も，とりあえず除外しないことにした。さらに，「ツツミ（堤）」と「ツツム（包む）」のように語形的には対応するが意味的な対応が希薄な例も，とりあえず除外しないことにした。「比較的ゆるい基準」というのは，このようなことをさす。

上のような方針で採集した結果，総数215語の転成名詞が得られた。拍数別にみると，次の(1)のようになる。

(1)　1拍＝1語，2拍＝19語，3拍＝80語，4拍＝111語，5拍＝4語

3拍と4拍については，かなりの語数が採集できたので，統計的な扱いができそうである。

総数215語の中には，対応する動詞も同時に採集できたものが52語含まれている。すなわち，動詞と転成名詞がペアで得られたものである。拍数別にみると，次の(2)のようになる。

(2)　1拍＝無し，2拍＝6組，3拍＝30組，4拍＝16組，5拍＝無し

動詞と転成名詞についてペアでアクセント情報が得られると，インフォーマント別にアクセント規則が守られているかどうかを確認することができる。第5章では，(2)の3拍と4拍のペアを中心に，この点を詳しく検討することにする。

第2章で述べたように，転成名詞のアクセント規則にとって重要な情報は，「単純動詞の場合の起伏式」という点である。総数215語の転成名詞の中から，対応する動詞のアクセントが起伏式であるものを選び出し，式の保持が守られているかどうかを検討することは，このアクセント規則がどの程度生き（延び）ているかをみる最も有効な方法となろう。

そこで，「対応する動詞のアクセントが起伏式である」という点の確認が問題となるが，ここでは「対応する動詞のアクセントについて，3.1.に示した4種の辞書のいずれにも全く（たとえ併用でも）平板式の記載がみられない」という条件を満たすことで代えることにした。この条件を満たすものを

拍数別にみると，次の(3)のようになる。

(3)　1拍＝無し，2拍＝12語，3拍＝52語，4拍＝91語，5拍＝4語

第4章では，(3)の3拍と4拍の転成名詞を中心に，式の保持のあり方を詳しくみていくことにする。

なお，(2)と(3)の両方に該当する語が，3拍に7語，4拍に3語あることを付け加えておく。

4．起伏式単純動詞からの転成名詞のアクセント

4.1.　転成名詞における起伏式保持の実態

3.2.で述べた方法によって採集された転成名詞のうち，3拍語（52語），4拍語（91語）について，まず，起伏式の保持の実態を概観する。表1に3拍転成名詞，表2に4拍転成名詞を掲げる。

表の見方についての注意を，次にいくつか箇条書きにして述べる。

(1)　左ページは，一語（あるいは一用法）について，情報を左から順に次のように配列する。

(a)　通し番号。（＊，＃については注11)を参照）

(b)　語形。（必要に応じて識別のための文脈を付与）

(c)　4種の辞書におけるアクセント。『新明解』，『ＮＨＫ』『明解ア』『全国ア』の順。

(d)　Ｘとｙのアクセント。

(e)　Ａ（若）からｓ（高）までの19名のアクセント。

(2)　右ページは，一語（あるいは一用法）について，情報を左から順に次のように配列する。

(f)　左ページと照合するための通し番号。

(g)　動詞語形／転成名詞語形。

(h)　／調査時における読み上げ文。[注10)]

(i)　調査票の巻番号－その巻の通し番号。

(3)　(c)(d)(e)のアクセントは，式のレベルの区別を表示する。

(4) 式の区別は，●＝起伏式，○＝平板式，◎＝起伏式・平板式の併用の３種の記号で表す。（２箇所の×は調査漏れか？）

(5) 縦方向の配列は，(e)の19名のアクセントにおいて，起伏式が多く現れる順である。したがって，(a)＝(f)の通し番号の若い語の方が，全体として●が多いことから黒っぽい印象を与え，式の保持がよく行われていることになる。（同点の場合は適宜配列し，●と◎では，●を優先した。）

表１，表２に示した転成名詞は，いずれも辞書の見出し，あるいは子見出しに採られているという点からみて，大体はすでに転成されて久しいものばかりと言ってよかろう。したがって，今日，必要に応じて任意に動詞から転成されたものというよりは，むしろすでに名詞として語彙的に定着し，伝承されてきたものと考えられる。

概観して分かるように，19人全員が揃って起伏式を保持している語から，次第に保持する人数が減少していき，やがて一人も保持していない語に至るという連続的な分布を示している。この点を分かりやすくするために，起伏式を保持している人数を横軸にとり，それぞれに属する語数の累積を縦軸にとって，３拍語と４拍語を対比させたのが，図１である。[注11]

また，起伏式の保持とは裏腹の関係にある平板式の出現について，平板式をもつ人数を横軸にとり，それぞれに属する語数の累積を縦軸にとって，３拍語と４拍語を対比させたのが，図２である。

図１，図２から，起伏式の保持と平板式の出現に関して，３拍語と４拍語との間に相当大きな違いがあることが分かる。すなわち，起伏式の保持において３拍語が優勢，平板式の出現において４拍語が優勢という傾向が，かなりはっきりと認められる。

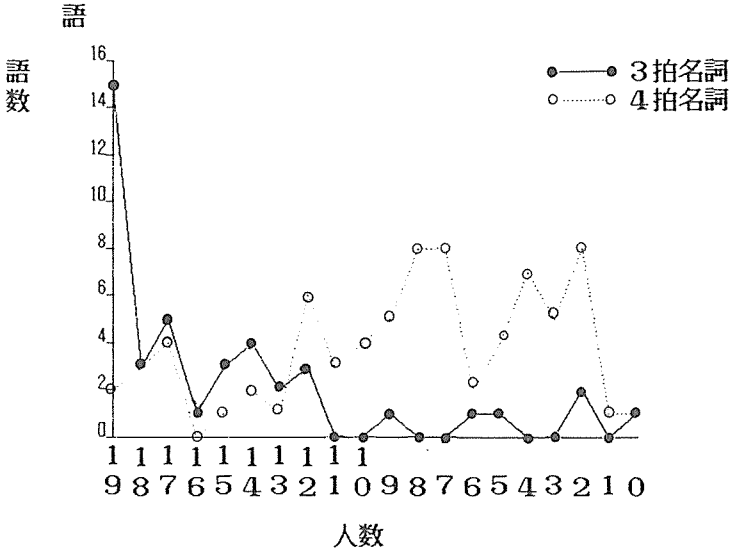

図1　起伏式アクセントの保持の比較

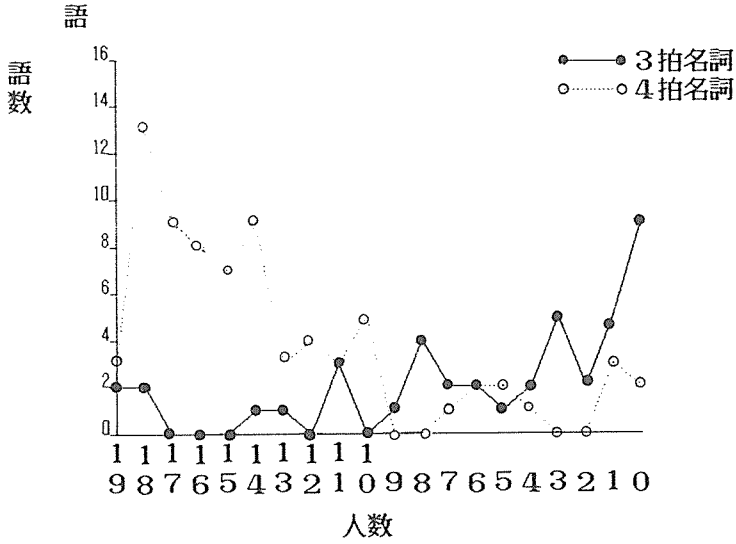

図2　平板式アクセントの出現の比較

表１（左）　３拍語

1*	スマイ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
2	タノミ（になる）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
3	カセギ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
4	コノミ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
5	カマエ（が立派な家）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
6	オサエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
7	カギリ（がある）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
8	カゲリ	○	●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
9	ナオシ（に出す）	●	●●●	○●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
10	ネタミ	●	◎◎◎		●●●●●●●●●●●●●●●●●●
11	コタエ	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●◎
12	カマエ（正眼の～）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●◎●●●●●
13	ソナエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●◎●●●●●●●●●●
14	タノミ（を聞く）	●	●●●	●●	●●●●◎●●●●●●●●●●●●●●
15	クルイ	●	●◎		●●●●●●●●●●●◎●●●●●◎●
16	オボエ（身に～が）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●◎●●●●●●◎●
17	サバキ（裁き）	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●○●
18*#	シブキ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●◎●●●●○●●
19	ツカエ（痞）	●	●●●	●●	●●●●●●●●◎●●●○●●●●◎●
20	カギリ（を尽くす）	●	●●●		●●◎●●●●●●●◎●●●○●●●●
21#	クギリ	●	◎◎◎		○●●●●●◎●◎●●●●●●●●◎
22	アガキ	●	●●●	●●	●●◎●●○●●●●●●●●●●○●●
23	マヨイ	●	●●●		●●●●●●●○●●●●●●●○◎●
24	ホツレ	◎	●●●	●●	●●●●●●●●●●◎●●○◎●●●○●
25	イソギ	●	●●●	●○	○●◎●◎●●●●●◎●●○●●●●●●
26	ヒカエ	●	●◎●	●●	○◎◎◎●●●●●●●◎○●●●●●●
27	オボエ（がめでたい）	●	●●●	○●	●●●●●○●●○●○●●●●●●●●
28*	ツツミ（堤）	●	●●●	○●	●◎◎●◎○●●○○●●●●●●◎●●
29	ウレエ	◎	◎●◎	●●	●●●●●×●○●○●●●●●●●○○
30	イワイ	●	●●○	○●	●●●●○●●◎◎●●○○●●◎○●
31	キシミ	●	●	○●	●●●◎◎●◎●○●●○◎●○●●○●
32	ナジミ	●	◎●●		○●●●●●●○●●◎○●○●×●○●
33	シゴキ	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●◎○○●○●○●○◎●
34	アオリ（を食う）	●	◎●●		◎●○●●●●●○●●○◎●●●○○◎
35	ツドイ	◎	◎◎◎	●●	◎●●◎●○●○○◎●●●●○●◎○●

表１（右）　３拍語

1*	スマウ	／スマイ	／住まいが広い。10-541
2	タノム	／タノミ	／頼みになる。12-50
3	カセグ	／カセギ	／稼ぎが。5-320
4	コノム	／コノミ	／好みが違う。8-241
5	カマエル	／カマエ	／構えが立派な家だ。5-429
6	オサエル	／オサエ	／押さえが利かない。4-440
7	カギル	／カギリ	／限りがある。5-204
8	カゲル	／カゲリ	／陰りが。5-272
9	ナオス	／ナオシ	／直しに出す。13-595
10	ネタム	／ネタミ	／妬みを買う。22-153
11	コタエル	／コタエ	／答えを間違える。20-239
12	カマエル	／カマエ	／正眼の構えをする。5-430
13	ソナエル	／ソナエ	／備えを固める。11-335
14	タノム	／タノミ	／頼みを聞き入れる。12-50
15	クルウ	／クルイ	／私の目に狂いはない。20-105
16	オボエル	／オボエ	／身に覚えがない。4-580
17	サバク	／サバキ	／裁きに服する。8-579
18*♯	シブク	／シブキ	／しぶきがかかる。9-382
19	ツカエル	／ツカエ	／胸の痞が下りた。12-459
20	カギル	／カギリ	／ぜいたくのかぎりをつくす。5-203
21♯	クギル	／クギリ	／区切りをつける。20-64
22	アガク	／アガキ	／足掻きがとれない。2-89,19-12
23	マヨウ	／マヨイ	／迷いがある。23-25
24	ホツレル	／ホツレ	／髪のほつれをかき上げる。16-462
25	イソグ	／イソギ	／この用は急ぎだ。3-136
26	ヒカエル	／ヒカエ	／控えの選手。控えが。15-243
27	オボエル	／オボエ	／社長の覚えがめでたい。4-581
28*	ツツム	／ツツミ	／（出水で）堤が切れる。12-550
29	ウレエル	／ウレエ	／憂えが深い。19-285
30	イワウ	／イワイ	／七五三の祝いをする。3-437
31	キシム	／キシミ	／軋みが。6-184
32	ナジム	／ナジミ	／なじみが薄い。22-77
33	シゴク	／シゴキ	／しごきに耐え抜く。9-198
34	アオル	／アオリ	／煽りを食う。19-11
35	ツドウ	／ツドイ	／映画の集いを開く。12-560

36	タワケ	◎	●●●	○●	●◎◎◎○●●○◎●○○○●●●◎○●
37	スゴミ	●	●●●	○●	◎●●○◎●●◎○○○○◎○◎●●○●●
38	サカエ	◎	◎◎◎	●●	●○●●●○●●○○●●○●●●○◎○
39	ナマリ	◎	●●●	○●	●●●○●●●●●●○○○●○●○◎○
40	チギリ	◎	◎◎◎	○●	●○◎○○●●○◎○○○●●●●◎●◎
41#	メモリ	●	◎●◎	○○	◎●○○●●●○◎○●●○●●◎○○○
42#	スダチ	◎	◎◎◎	○○	●○◎○○○○◎○○○○◎●●◎○○◎
43	カクレ（もない）	○	◎		◎●○○●○○○●○◎●●○◎●○○○
44#	ナズケ	●	◎●●		○○○○●●●○○○○●○○○◎○○●
45	ソロイ	●	◎●●		○○○○●○○○●●○●○●○○○◎○
46*	タクミ（巧み）	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○◎○○●○○○○○◎○●◎
47	ノロイ（呪い）	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○●○○◎◎○○○○◎○◎○○
48#	エズケ	●	◎	○○	●○○○○○●○○○○○○○○●○○●
49	マギレ（もない）	●	●●●	○●	○○○○○○○○○○◎○○○○●○○○
50	ツムギ（紬）	◎	◎●◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○◎○○○◎
51*	タクミ（匠）	◎	◎◎	○○	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
52	イコイ	●	○◎○	○○	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

36　タワケル／タワケ　　／戯けをつくす。12-121
37　スゴム　／スゴミ　　／凄みがある。10-450

38　サカエル／サカエ　　／国の栄えを祈願する。8-450
39　ナマル　／ナマリ　　／訛が強い。14-120
40　チギル　／チギリ　　／契りを結ぶ。12-227

41♯ メモル　／メモリ　　／目盛りを読む。17-480

42♯ スダツ　／スダチ　　／巣立ちをする。10-486

43　カクレル／カクレ　　／隠れもない事実。5-248

44♯ ナズケル／ナズケ　　／生まれた子供の名づけを頼まれた。22-78
45　ソロウ　／ソロイ　　／揃いの服。揃いが。21-213

46* タクム　／タクミ　　／話が巧みだ。11-520
47　ノロウ　／ノロイ　　／呪いをかける。14-469

48♯ エズケル／エズケ　　／餌付けに成功する。1-51

49　マギレル／マギレ　　／紛れもない事実。16-582
50　ツムグ　／ツムギ　　／紬を織る。12-595

51* タクム　／タクミ　　／飛騨の匠が造った細工。11-521
52　イコウ　／イコイ　　／憩いをする場所が欲しい。3-80

表２（左）　４拍語

1	コワガリ	●		●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
2	アキナイ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
3*#	イネムリ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●◎●
4#	ヨクバリ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●○●
5	サムガリ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●○●●
6	アツガリ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●○●●
7#	ハバタキ	●	●●●	○●	●●●●●●●●○●●●●●●●●●
8#	キズカイ	●	●●●	●●	●●◎●●●●●●●●●●●●●○●
9	アツマリ	●	●●●	●●	●◎●●●●●◎●○●●●●●●○●●
10	アヤマリ（誤）	●	●●●	●●	●●●●●●●○◎◎●●●●●○◎●
11	タノシミ	●	●◎●	●●	●●●●◎●●●◎●◎●●●○●●○●
12	ココロエ	●	●●◎	●●	●◎●●●●●○◎◎●●●●●○◎●
13#	ミガマエ	●	●●●	●●	◎●●●●●●●●●○●●●●●○○●
14	ツヨガリ	●	◎◎◎	○●	●●●◎●●●●◎○◎●○●●●○○●
15*	マジロギ（もしない）	●	◎◎◎	○●	●●○●●●●◎●○◎●●●◎●○○●
16	アツラエ	●	◎◎◎	◎●	○○◎○●○●●○●●●●●●●●●
17*	アヤマチ	●	◎◎●	●●	●●◎●●●●○●○○◎●●●○○●
18	アズカリ	●	●●●	○●	○●○◎●○◎●◎○●●◎●◎●○◎●
19	アヤマリ（謝）	◎	●	◎○	○○○◎●●●◎◎○○●◎●●●○●●
20	コトワリ（断）	●	◎●●	○●	●◎●○●○●○●○◎◎○●●●○○●
21	ガンバリ	◎	◎	○●	○◎◎●●●●◎○●○●○●●○○●○
22	オトロエ	◎	◎●●	●●	○●○●◎●○◎●○◎●○●●●○○◎
23#	コトズケ	◎	◎◎◎	○●	○○◎●●○◎●◎○●◎○●●●○○●
24	クルシミ	○	◎◎		○○○●◎●●○●◎○◎●●●○○●
25	ココロミ	●	●◎●	○●	○◎●◎◎◎○○●○○◎◎●○●○◎●
26	オギナイ	◎	◎◎◎	○○	◎◎○●◎◎○◎◎○○○○○○●○◎●
27	ツクロイ	●	●●●	○●	○○○○●●●●◎○○●○●●●○◎●
28	アヤツリ	●	◎●	○●	●○◎◎◎●●○●○○○○●◎●○○●
29	アシライ（客の～）	◎	◎◎◎	○●	○●●◎●○○○●◎○●◎○●●○○◎
30	アラワレ	◎	●●●	○●	○●○●○●○○●○○●●●●○○◎
31	イロドリ	◎	◎◎◎	○●	○◎○◎○○◎○●○◎●◎○●●○○●
32	ワキマエ	◎	●●●	○○	○○◎◎●○●●◎○○●◎○○●○○◎

表２（右）　４拍語

1	コワガル	／コワガリ	／あいつは怖がりだ。8-353
2	アキナウ	／アキナイ	／商いがうまくいく。2-130
3*#	イネムル	／イネムリ	／居眠りをする。3-355
4#	ヨクバル	／ヨクバリ	／欲張りな男。欲張りだ。18-288
5	サムガル	／サムガリ	／あの子は寒がりだ。8-592
6	アツガル	／アツガリ	／あの人は暑がりだ。2-293
7#	ハバタク	／ハバタキ	／鳥が羽ばたきをする。15-88
8#	キズカウ	／キズカイ	／気遣いが。6-258
9	アツマル	／アツマリ	／集まりを開く。2-308
10	アヤマル	／アヤマリ	／誤りを正す。2-435
11	タノシム	／タノシミ	／楽しみが増える。12-49
12	ココロエル	／ココロエ	／心得を守る。8-82
13#	ミガマエル	／ミガマエ	／身構えをする。17-175
14	ツヨガル	／ツヨガリ	／強がりを言う。13-13
15*	マジログ	／マジロギ	／瞬ぎもしないで見つめる。17-12
16	アツラエル	／アツラエ	／誂えに出す。2-309
17*	アヤマツ	／アヤマチ	／過ちをくり返す。2-434
18	アズカル	／アズカリ	／勝負は預かりとする。2-249
19	アヤマル	／アヤマリ	／一言の謝りもない。2-436
20	コトワル	／コトワリ	／断りもなく…。8-219
21	ガンバル	／ガンバリ	／頑張りが。6-66
22	オトロエル	／オトロエ	／体力の衰えを感じる。4-555
23#	コトズケル	／コトズケ	／言付けをする。8-204
24	クルシム	／クルシミ	／苦しみに耐える。20-106
25	ココロミル	／ココロミ	／試みが成功する。8-97
26	オギナウ	／オギナイ	／補いをする。4-392
27	ツクロウ	／ツクロイ	／繕いをする。12-509
28	アヤツル	／アヤツリ	／操りが始まった。（操り人形）2-432
29	アシラウ	／アシライ	／客のあしらいが悪い。2-245
30	アラワレル	／アラワレ	／それは愛情の現われだ。2-494
31	イロドル	／イロドリ	／色どりが美しい。3-433
32	ワキマエル	／ワキマエ	／弁えがない。18-611

33*	ハカライ	◎	◎◎◎	○●	○◎○◎◎○○○●○○◎◎●○●○○◎●
34	アラソイ	●	◎◎◎	○●	○○◎◎◎○○○◎●○◎●○●○●○○◎
35	タシカメ	◎	○	○○	○●●○●○●●●○○○○○◎◎●○○○
36	ヨロコビ	●	◎◎◎	○●	○○○○○○○◎●○○○○●●●●○●●
37	カナシミ	◎	◎◎○	○●	○○○●○●●○○○○◎●○●○●◎○◎
38	カタムキ	◎	◎◎◎	○●	○○○◎○○○◎●○○○○○●●●○○●
39	サエズリ		◎◎◎		○○○◎●○○●◎○◎○○○◎●●○○◎
40	オドロキ	●	●●●	○●	○○○○○○○◎○●○◎●○●●●○○●
41	タカマリ	○	◎◎		○●◎●●○○●○○○○○○◎◎●○○○
42	タシナミ	◎	◎◎◎	○●	○◎○○○○○○◎●●○●○●○●○○○
43	シツラエ（会場の～）	◎		◎●	○○○○●○●◎◎○○○○●●○●○○○
44	ホコロビ	●	●●●	○●	○●○◎○○○○◎◎○●○○●○●○○◎
45	オサマリ	◎	◎◎◎	○●	○●○○◎○○○○◎○○○◎○●●○○●
46	タクラミ	◎	◎◎◎	○●	○●◎○◎○○◎◎○○○○◎○○○●○○○
47	マジワリ	◎	◎◎◎	○○	○○◎◎○○○◎○○○○○○○◎◎●○◎◎
48	マカナイ	◎	●●●	○●	○○○○●○○●●○○○○○●●●◎○○
49	ニギワイ	◎	◎●●	○●	○○○○●○●○◎○○●○○●●○○○
50	トドロキ		◎ ●		○○○◎◎○○○○○○●○●◎●○○●
51	イトナミ	◎	◎◎○	○●	○○○○◎○○○○○○◎●◎●●○○●
52	イツワリ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○●○○○○◎●○◎●◎○○●
53	アナドリ（を受ける）	◎	◎◎◎	○●	○●○◎◎○◎◎○○○○○○○●○○●
54	タメライ		◎◎○		○◎○○●○◎○●○○○○◎○●○◎○
55	コラシメ	◎	◎◎	○○	○○○○◎○○○◎○○●◎●○◎○○◎
56	カタヨリ	●	◎◎◎	○●	○○○●○○●●○○○○○●○●○○◎
57	アワレミ	◎	◎◎	○●	○○○◎○●○○◎○○○○○◎●○○○
58	マタタキ	●	◎●●	○●	○●○○○○○◎○○○○◎○●●○○○
59	クワダテ	◎	◎◎◎	○○	○○○○●○○○○○○○○◎●●○○◎
60	ツツシミ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○◎○○●○○●●○○◎
61	アキラメ	●	◎◎◎	○●	○◎○○◎○○○○○○○○◎○●○○◎
62	ザワメキ		◎◎◎		○○○○○○◎○○○○●○●○●○○○
63	シタシミ	◎	◎◎●	○●	○○○○○○○●○○○○○◎●○○○●
64	モクロミ	◎	◎◎◎	○●	○●○○○●○○○○○○○◎○◎○○○
65	ゴマカシ	●	◎◎◎	○●	○○○●○○◎○○○○○○●○○○○◎
66	ホホエミ	◎	◎◎◎	○●	○○○◎○○○○○○○○○◎○●○○●
67	イタワリ	●	◎●◎	○●	○○○○○○○○○○○●○◎●◎○○○
68	ツグナイ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○◎○○◎●○◎○

33* ハカラウ　／ハカライ　／寛大な計らいに感謝する。14-520
34　アラソウ　／アラソイ　／争いを避ける。2-457

35　タシカメル／タシカメ　／確かめをする。11-533
36　ヨロコブ　／ヨロコビ　／喜びを表わす。18-377
37　カナシム　／カナシミ　／悲しみが。5-416
38　カタムク　／カタムキ　／傾が。5-358
39　サエズル　／サエズリ　／小鳥のさえずりが聞こえる。20-304

40　オドロク　／オドロキ　／心の驚きを隠す。4-556
41　タカマル　／タカマリ　／胸の高まりがきこえる。21-245
42　タシナム　／タシナミ　／華道の嗜みがある。11-538
43　シツラエル／シツラエ　／会場のしつらえが整った。9-317
44　ホコロビル／ホコロビ　／綻びを繕う。16-424
45　オサマル　／オサマリ　／収まりがつかない。4-451
46　タクラム　／タクラミ　／企みが露見する。11-522
47　マジワル　／マジワリ　／交わりが深い。17-13

48　マカナウ　／マカナイ　／当座の賄いにする。16-573
49　ニギワウ　／ニギワイ　／昔の賑わいを取り戻す。14-190
50　トドロク　／トドロキ　／雷の轟きが聞こえる。22-15
51　イトナム　／イトナミ　／冬の営みを急ぐ。（準備）3-333
52　イツワル　／イツワリ　／偽りを言う。3-319
53　アナドル　／アナドリ　／侮りを受ける。2-338
54　タメラウ　／タメライ　／何のためらいもない。21-315
55　コラシメル／コラシメ　／懲らしめが足りない。8-323

56　カタヨル　／カタヨリ　／偏りが。5-360
57　アワレム　／アワレミ　／哀れみを乞う。2-516

58　マタタク　／マタタキ　／星の瞬き。瞬きが。17-30
59　クワダテル／クワダテ　／企てが。7-218
60　ツツシム　／ツツシミ　／慎みが足りない。12-547
61　アキラメル／アキラメ　／あきらめが早い。2-133

62　ザワメク　／ザワメキ　／ざわめきが聞こえる。20-348
63　シタシム　／シタシミ　／親しみをこめる。9-258
64　モクロム　／モクロミ　／もくろみが外れる。17-540
65　ゴマカス　／ゴマカシ　／ごまかしが多い。8-276
66　ホホエム　／ホホエミ　／ほほえみを浮べる。16-486
67　イタワル　／イタワリ　／労りが足りない。3-169
68　ツグナウ　／ツグナイ　／償いをする。12-500

69*	オモムキ（趣）	◎	◎◎●	○●	○○○○○○○○○○○○○●○●○○●
70	イザナイ	◎	◎◎	○○	○○○○●○○○○○○○◎○○○●○○○
71	ウルオイ	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○●○◎○○○◎○○○○○○○
72#	トマドイ	◎	◎◎●	○●	○○○○○○○◎○○○○○○○○○●○○◎
73	ヒヤカシ	●	◎●●	○●	○○○○○○○◎○○○○◎○●○○○○○
74	ヨソオイ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○●○◎○◎○○○
75	タワムレ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○◎◎●○○○
76	ミチビキ	◎	◎◎◎	○●	○●○○○○○○○○○○○○○○●○○○
77	カタライ	●	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○●○○○○○○◎○○○
78	サスライ	◎	◎◎○	○●	○○○○○○○○○●○○○○○○○○○◎
79#	イラダチ	○	◎ ○		○○○○○○○○○○○○●○◎○○○○○
80	ヒラメキ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○◎○●○○○○○
81	ドヨメキ	◎	◎◎○	○●	○○○○○○○○○○○○○○◎○●○○○
82	ハゲマシ	◎	○○	○○	○○○○○○○○○○○○○○◎○●○○○
83	ヤスラギ	○	◎		○◎○○○○○○○○○○○○○○◎○○○
84#	ウラギリ	●	◎◎◎	○●	○○○○○○◎○○○○○◎○○○○○○○
85	ウヤマイ		◎◎○		○○○○○○○○○◎○○○○○○○◎○○○
86	ヘダタリ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○○●○○○○○
87#	ウラズケ	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○●
88*	ヤスライ	●	◎	○●	○○○○○○○○○◎○○○○○○○○○○○
89*	ナラワシ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○◎○○○○○○○
90	クツロギ	◎	◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
91*	マヤカシ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

69* オモムク　／オモムキ　／趣が。5-41
70　イザナウ　／イザナイ　／人の誘いを断る。3-91
71　ウルオウ　／ウルオイ　／うるおいがない。4-237
72# トマドウ　／トマドイ　／とまどいを見せる。13-427'
73　ヒヤカス　／ヒヤカシ　／冷やかしの客。冷やかしが。15~446
74　ヨソオウ　／ヨソオウ　／装いを改める。18-314
75　タワムレル／タワムレ　／戯れにやってみる。12-123

76　ミチビク　／ミチビキ　／神の導きによる。17-255
77　カタラウ　／カタライ　／語らいが。5-361
78　サスラウ　／サスライ　／さすらいの旅。さすらいが。8-530
79# イラダツ　／イラダチ　／苛立を覚える。19-209
80　ヒラメク　／ヒラメキ　／文章に閃きがある。15-479
81　ドヨメク　／ドヨメキ　／どよめきが聞こえる。13-448
82　ハゲマス　／ハゲマシ　／励ましを与える。14-556
83　ヤスラグ　／ヤスラギ　／安らぎを覚える。23-166
84# ウラギル　／ウラギリ　／裏切りは許せない。4-204
85　ウヤマウ　／ウヤマイ　／敬いの気持。敬いが。19-280

86　ヘダタル　／ヘダタリ　／隔たりがある。16-252
87# ウラズケル／ウラズケ　／裏付けを急ぐ。4-212
88* ヤスラウ　／ヤスライ　／心の休らいを求める。18-100
89* ナラワス　／ナラワシ　／正月には雑煮を食べる習わしになっている。14-141

90　クツログ　／クツロギ　／寛ぎがない生活。24-6
91* マヤカス　／マヤカシ　／そんなまやかしに騙されない。17-110

4.2.　3拍語と4拍語の比較

4.1.で認めた傾向をより明示的に捉えるために，19人のうち何人が起伏式を保持しているかについて五つの区間に分け，それぞれの区間に属する語数の百分率を，3拍語と4拍語とで対比させたものが図3である。

また，起伏式の保持とは裏腹の関係にある平板式の出現について，同じ方法で処理し，やはり3拍語と4拍語とで対比させたものが図4である。

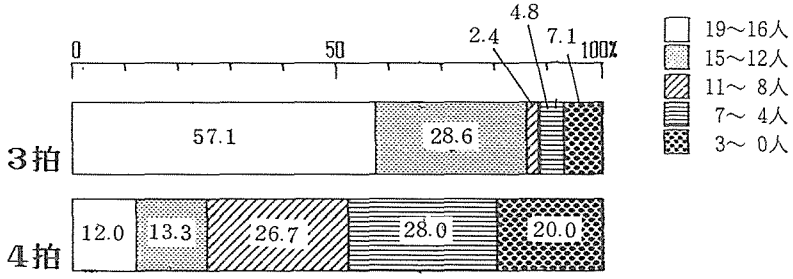

図3　起伏式アクセントの保持率の比較

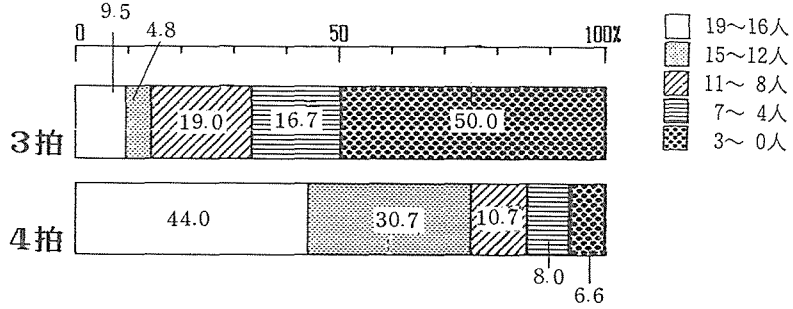

図4　平板式アクセントの出現率の比較

起伏式の保持に関しては，19〜16人の区間で，3拍語57.1％，4拍語12.0％とその差が著しいのが目立つ。次の15〜12人の区間まで含めて比べても，3拍語85.7％，4拍語25.3％となり，全19人の6割以上のインフォーマントが起伏式を保持している語数の率には，3倍以上の開きがある。

これとは丁度反対に，平板式の出現に関しては，19〜16人の区間で，3拍語 9.5％，4拍語44.0％とやはりその差が著しい。次の15〜12人の区間まで含めて比べると，3拍語14.3％，4拍語74.7％となり，全19人の6割以上のインフォーマントが平板式を出現させている語数の率には，5倍以上の開きがある。

以上から，『東京ア』のデータに関する限り，3拍語と4拍語とでは，起伏式の保持に大きな差のあることが確認できた。3拍語が起伏式をかなりよく保持し，平板式をあまり出現させていないのに対し，4拍語では，起伏式の保持が相当あやうくなって，その分平板式の出現をゆるしている，とみることができよう。[注12)]

4.3. インフォーマント間の比較

4.1.の表1，表2を概観しても分かるように，インフォーマントによって起伏式の保持にはかなりの差が認められる。ここでは，インフォーマントごとに起伏式の保持率を計算し，年齢順（つまりA〜sの順）に配列して比較する。保持率は次の式で計算した。

保持率＝起伏式の出現度数／全出現度数

＝（●＋◎）／｛●＋（◎×2）＋○｝

結果を3拍語，4拍語，3拍語と4拍語の平均に分けて，図5に示す。

19人全員の平均を求めると，3拍語が72.6％，4拍語が36.6％で，3拍語と4拍語の平均は54.6％となる。起伏式の保持率を全体としてみると，3拍語は7割を少し超えるのに対し，4拍語はその半分程度に過ぎないことが分かる。また，3拍語と4拍語をならした全体の保持率は，5割強ということになり，ようやく半分を超える線を守っているというところである。

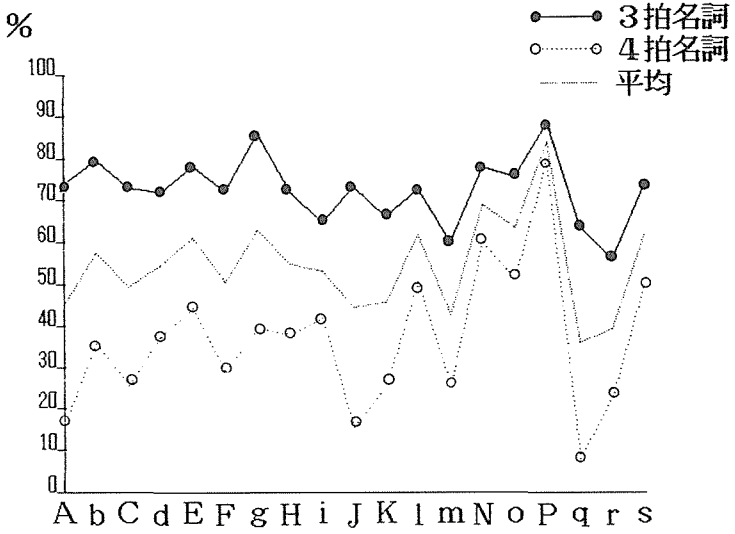

図5　インフォーマント別の起伏式アクセント保持率

図5をみると，3拍語では，平均の72.6%から大きく逸脱する個人がいない（最高のP氏が88.4%で＋15.8%，最低のr氏が56.0%で－16.6%）のに対し，4拍語では，平均の36.6%から大きく逸脱する個人が目立つ（最高のP氏が79.3%で＋42.7%，最低のq氏が 8.0%で－28.6%）。

図5からは，きれいな年齢差は認められない。しかし，q氏とr氏が高年層のわりにきわめて低い保持率（平均でq氏が35.9%，r氏が39.3%とこの二人だけが40%を割る）であることを除くと，P氏をはじめ比較的高年層寄りのl，N，o，sの各氏は，平均を超える保持率を保ち，かつ3拍語と4拍語の保持率が接近している点が目につく。これに対し，若年層寄りの例えばg，E，bの各氏は，同じく平均を超える保持率を保ってはいるが，3拍語と4拍語の保持率の距離が大きくなっている。3拍語が若年層でも，ほぼ7割台の保持率を保っていることを考え合わせると，ここに4拍語で若年層に向って保持率が落ちていく様子が，わずかながら読み取れる。

同じ1929年生れでありながら，最も高い保持率を示すP氏（下町出身の男

性）と，最も低い保持率を示すq氏（山の手出身の女性）との対比は強く印象に残るが，両者を隔てる要因が何であるのか，今のところはよく分からない。他の項目でどのような傾向を見せるのか，合わせて考察すべき興味深い問題である。

4.4. 起伏式保持に関わる言語的要因

これまでの記述から，拍数，すなわち単語の長さという要因が起伏式の保持に大きく関わっていることは，ほぼ明らかであろう。ここでは，その他に考えられるいくつかの言語的な要因について，例を示しながら簡単に触れることにしたい。

4.1.表1の3拍語の中には，例えば「2 タノミ（になる）」と「14タノミ（を聞き入れる）」，「7 カギリ（がある）」と「20（～の）カギリ（を尽くす）」のように，同音語（あるいは多義語の意義区分）が，アクセントの型によって区別される場合がある。『東京ア』の情報によって，それぞれの型を使う人数を括弧内に入れて次に示す。

2：タ’ノミ（16），タノ’ミ（0），タノミ’（9），タノミ（0）
14：タ’ノミ（5），タノ’ミ（2），タノミ’（14），タノミ（1）
7：カ’ギリ（0），カギ’リ（1），カギリ’（19），カギリ（0）
20：カ’ギリ（17），カギ’リ（0），カギリ’（5），カギリ（3）

この例のように，一方の語や意義区分を頭高型に割り振って区別を保とうとする傾向がみられるのであるが，そうすることによって，結果としては起伏式が自動的に保持されることになる。3拍転成名詞には，頭高型アクセントをもつものがかなりあるが，それらの分だけ起伏式の保持率は高く保たれるとみることができよう。[注13]

表2の4拍語の中で起伏式の保持率が高い方に並ぶ語に，「1 コワガリ」「5 サムガリ」「6 アツガリ」「14ツヨガリ」の4語がある。これらを使うわれわれの意識の中には，次のような関係が生きていると思われる。

1： コワイ ↔ コワガル ↔ コワガリ

5：　サムイ　↔　サムガル　↔　サムガリ

6：　アツイ　↔　アツガル　↔　アツガリ

14：　ツヨイ　↔　ツヨガル　↔　ツヨガリ

ここに示した，形容詞と，その派生動詞と，さらにその転成名詞の場合のように，互いの意味関係が透明で，比較的無理なく相互にたどれるときは，もとのアクセントの式が保持されやすいと考えられる。ただ，「コワガリ，サムガリ，アツガリ」がいずれも「そのような性質をもつ人」を表すのに対して，「ツヨガリ」は人ではなく「そのような性質の言動」を表し，普通は「強がりを言う」という固定した表現の中で使われる。この点が，他の3語に比べて起伏式の保持率がやや低くなっている原因かとも推測される。

転成名詞の中には，慣用的な固定表現の中でしか使われなくなっているものも多い。例えば，3拍語の「43カクレもない～」「49マギレもない～」は，通常はこの形でしか使われないと思われる。このような固定表現には全体で一語相当という意識がはたらきやすいので，起伏式の転成名詞が平板式に変わる素地が用意されることになる。次の例が，その典型であろう。

(1)　ゆるぎがない地位を占める。

(2)　ゆるぎのない地位を占める。

(3)　ゆるぎない地位を占める。

(1)は，まだ自由な結合の段階とみられるが，(2)で「ゆるぎのない」という一語相当意識がかなり明確になり，(3)で完全な一語となる。この場合は，(2)の段階で助詞が「の」となりうることも，平板式に変わる要因として強くはたらいていると思われる。

このように，意味・用法に制約のある「拘束された転成名詞」と，そのような制約のない「自由な転成名詞」とでは，式の保持に関しても違いが出てくるものと推定される。

5．単純動詞とその転成名詞のペアのアクセント

5.1.　ペアごとにみられる式の保持の実態

3.2.で述べた方法によって採集された単純動詞とその転成名詞のペアのうち，3拍語（30組），4拍語（16組）について，まず，式の保持の実態を概観する。表3に3拍転成名詞のペア，表4に4拍転成名詞のペアを掲げる。横方向の情報の配列，及び記号の意味は，表1，表2の場合と同じである。また，縦方向の配列は，式の保持がよく守られている順である。

表3　3拍名詞ペア

1	オサエル	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	オサエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
2	コタエル	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	コタエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●◎
3	ソナエル	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●◎●●●
	ソナエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●◎●●●●●●●●●●
4	イカル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	イカリ	◎	◎◎◎	●●	●●●●●○●●●●●●●●●●●●
5	モツレル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	モツレ	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●◎●●○●●●●●
6	ツカエル	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	ツカエ	●	●●●	●●	●●●●●●●●◎●●●○●●●●◎●
7	ナノル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●●○●●●●●●●
	ナノリ	◎	◎◎◎	●●	●●●○●●●●◎●●◎◎●●●●●◎
8	ムクム	◎	●◎●	●●	○●○●●●●●●○●●◎●●●●○●
	ムクミ	○	◎◎◎	●●	○●◎◎●●●●◎○●●◎●●●○○●
9	アカス	○	◎◎	○○	○○○●○○○○○○○○○○○○●○◎
	アカシ	○	○○○	○●	○○○○○○○○○○○○○○○○○○

10	マツル	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○●○○○○○●○○●
	マツリ	◎	◎◎◎	○○	○○◎○○○○○○○○○○○○○●○○○
11	オーウ	◎	○○○	○○	○○○○○○○○○○●◎○○○○○○○○
	オーイ	◎	◎◎◎	○●	◎○○○○○○○○○○○○●○○○○○○
12	サカエル	●	●●●		●●●●●●●●●○●●◎◎●●○●○
	サカエ	◎	◎◎◎	●●	●○●●●○●●○○●●○●●●○◎○
13	イタル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●◎●●◎●●●●●●●
	イタリ	○	◎◎○	●○	●◎●●●○●●◎●○◎●●●●●●○
14	イサメル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●◎◎●●◎●●●○●●●
	イサメ	○	◎◎◎		●●◎●●●●◎◎●○●◎●◎●○●●
15	コナレル	○	○○◎	○○	◎○○◎○○○○○○○○◎○○●○○○○
	コナレ	○	○○○	●○	◎○●○◎●◎○◎○○○○○○○○○○
16	ムクイル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●○●●●●●●●●●○
	ムクイ	◎	◎◎◎	●●	●●●○●●◎●○●●●○●●●○○○
17	チカウ	◎	◎◎●	○●	○●○●○○○○○●◎○○○○○○○●
	チカイ	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○●●○◎○○●○○○
18	ユガム	○	○◎◎	○○	○○○○○●◎○○○○●○○○○◎○○○
	ユガミ	○	◎◎◎		●●●○○●●○●○●○○○○●○○○
19	ノロケル	●	◎◎◎		○○○○●●●○○○○●◎○○○○●○
	ノロケ	●	◎◎◎	○●	●○○○●○●○◎○○○○○○◎○○●●
20	サグル	○	○◎◎	○○	○○○○○○●○◎●◎◎○○○●○●●○
	サグリ	○	◎◎◎		●●○○◎●◎○●●●●○○●○○●○
21	ツタエル	○	◎◎○	○○	○○○○○○○○○○○○○○●○○●○
	ツタエ	○	◎◎		○●○●●○●○○○◎○●○●◎○◎○
22	コナス	○	○○○	○○	●○○●○○○○○○○○○○○○○○○
	コナシ	○	◎◎◎		○●●○●○○○●○○●○○○○◎◎○
23	シメス	○	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	シメシ	○	◎◎◎	●○	●○◎○○○●○●○◎◎●●●●○●●

24	ツボム	◎	●●○	◎●	○○○○○○○○○○○○○○○○◎●●◎
	ツボミ	●	●●●	○●	●○◎●○○●○●●●○◎◎●●●●●●
25	ユルグ	●	◎◎◎		●●◎●●●●●○●●●●○●●●●●
	ユルギ	●	◎◎◎		○○○◎○●●○○○○○○○○●○●○
26	ヨドム	◎	●●●	●●	◎●◎●●●●○○●●●●○●○●●●
	ヨドミ	◎	◎◎◎	○○	●○○○○○●○○○○○○○○○○○◎
27	ツズル	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○●○○●○○○○●○●○○○
	ツズリ	◎	◎◎◎	○○	●●●○●●●●◎●●●●●●●●●○
28	ツムグ	●	●●●	○●	◎●○●○●●●○●●●●●●●●●●
	ツムギ	◎	◎●◎	○●	○○○○○○○○○○○○○○○◎○○○◎
29	エズケル	●		●●	○●●●●●●●●◎●◎●●●●●●●
	エズケ	●	◎	○○	●○○○○○●○○○○○○○○●○○●
30	ホコル	●	◎●●		●●●●●●●●○●●●●●●●●●◎
	ホコリ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○○○◎○○○○◎○

表4　4拍名詞ペア

1	ウッタエル	◎	◎◎◎	●○	●●●●●●●●●●◎●●●●○●◎
	ウッタエ	◎	○○○	●○	●●●○●●●●●●●○●●●◎●○
2	タクワエル	◎	●◎◎	●●	●●●●●●●●●●●●●●●○●
	タクワエ	◎	◎◎●	●○	●●●●◎●●●●◎●○●◎●○○◎
3	アツラエル	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	アツラエ	●	◎◎◎	◎●	○○◎○●○●●○●●●●●●●●●●
4	ワキマエル	●	●●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●●
	ワキマエ	◎	●●●	○○	○○◎◎●○●●◎○○●◎○○●○○◎
5	ツブヤク	●	◎●●		●●●●●●●●●●●●●●●●●◎
	ツブヤキ	◎	◎◎◎	○●	○○◎○○○○●○○○●○◎●●○◎○
6	チカズク	◎	●●●	●●	○●◎●◎●●◎○●●○●●●○●◎●
	チカズキ	◎	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○○○○○○○○○○
7	サゲスム	●	◎◎◎		○●●●●●●○●●●●●●●●●
	サゲスミ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○●◎○○◎◎○○◎○○○◎

8	ササヤク	●	◎◎◎		●●●●◎●●●◎●●●●●●○●●◎
	ササヤキ	◎	◎◎○	○●	○○○◎◎○●◎○○○○○●●●○○○
9	オトズレル	◎	●◎●	●●	●●●●●○●●●●●○●●●●●●●
	オトズレ	◎	◎◎○	●●	○◎○○○○○○○●○○●○●◎●○○◎
10	ヨソオウ	●	●●●	○●	○●●●●●●●○●●●●○●●●●○
	ヨソオイ	◎	◎◎◎	○●	○○○○○○○○○○○●○◎○○○○○
11	アジワウ	○	◎◎◎	●●	●●●●●●◎●◎◎●●●○●●○●●
	アジワイ	○	◎◎◎		○○○○○○○○○○○○○○○●○○○
12	ホドコス	●	◎◎◎	●○	●●●●●●●●○●●●●●●●●◎○
	ホドコシ	●	◎◎◎	○○	○○○○○○○○○○○○●○◎○○○○◎○
13	カカワル	◎	◎◎◎	●○	◎●●●●●●●●●●●●●●●●●◎
	カカワリ	○	◎○◎		○○○○○○○○○○○○○○●◎●○○○
14	サマタゲル	◎	●◎◎	●●	●●●●●●●●◎●●●●●●●●●●
	サマタゲ	◎	◎◎○	○○	○○○○◎○○○○○○○◎○◎○◎○○○
15	ナグサメル	◎	◎◎◎	●○	●●●●●●●●●●●●●●●○●●
	ナグサメ	○	◎○●		○○○○○○○○○○○○○○○○◎○○○
16	イマシメル	◎	◎◎◎	●●	●●●●●●●●●●●◎●○●●●●●
	イマシメ	○	◎◎○		○○○○○○○○○○○○○○◎○○○○○

概観して分かるように，全員が式を保持しているペアから，中間的なものを経て，ほとんど全員が式を保持していないペアに至るまで連続的な分布を示している。また，3拍語の「9アカス・アカシ（証）」「10マツル・マツリ（祭）」「11オーウ・オーイ（覆）」のペアのように，ほぼ全員が平板式を保持するものもある。

ペアごとにみられる式の保持の実態を，さらに分かりやすく見るために，動詞と転成名詞を一まとめにして記号を与えたものが，表5である。ここでは，動詞／転成名詞のペアをさらに次のように記号化し，分類した。

(1) 式を保持する。　●＝●／●

○＝○／○

(2) 半ば式を保持する。　◎＝◎／◎

▲＝●／◎，◎／●

△＝○／◎，◎／○

(3) 式を保持しない。　－＝●／○

÷＝○／●

また，右のページに，「調査時における読み上げ文」，「調査票の巻番号－その巻の通し番号」を参考のために掲げた。[注14]

表５（左）

３拍名詞

1	オサエル／オサエ	●●●●●●●●●●●●●●●●●
2	コタエル／コタエ	●●●●●●●●●●●●●●●●▲
3	ソナエル／ソナエ	●●●●●●●●▲●●●●●●▲●●●
4	イカル　／イカリ	●●●●●－●●●●●●●●●●●●
5	モツレル／モツレ	●●●●●●●●●●▲●●－●●●●●
6	ツカエル／ツカエ	●●●●●●●●▲●●●－●●●●▲●
7	ナノル　／ナノリ	●●●－●●●●▲●●△▲●●●●●▲
8	ムクム　／ムクミ	○●△▲●●●●▲○●●◎●●●－○●
9	アカス　／アカシ	○○○－○○○○○○○○○○○○－○△
10	マツル　／マツリ	○○△○○○○○○－○○○○○●○○－
11	オーウ　／オーイ	△○○○○○○○○○－△÷○○○○○○
12	サカエル／サカエ	●－●●●－●●－○●●△▲●●○▲○
13	イタル　／イタリ	●▲●●●－●●◎●－◎●●●●●●－
14	イサメル／イサメ	●●▲●●●●◎◎●－▲▲●▲÷－●●
15	コナレル／コナレ	◎○÷△△÷△○△○○△○○－○○○○
16	ムクイル／ムクイ	●●●－●●▲●○●●●－●●●－－○
17	チカウ　／チカイ	○－○－○○○○○●▲○△○○÷○○－
18	ユガム　／ユガミ	÷÷÷○○●▲○÷○●○○○○▲○○○
19	ノロケル／ノロケ	÷○○○●－●○△○○－△○△○○●÷
20	サグル　／サグリ	÷÷○○△÷▲○▲●▲▲○○●○－●○
21	ツタエル／ツタエ	○÷○÷÷○÷○○○△○÷○●△○▲○
22	コナス　／コナシ	－÷÷－÷○○○÷○○÷○○○○△△○
23	シメス　／シメシ	●－▲－－－●－●－▲▲●●●●－●●
24	ツボム　／ツボミ	÷○△÷○○÷○÷÷○△△÷÷▲●●▲
25	エルグ　／ユルギ	－－△▲－●●－○－－－－○－●－●－
26	ヨドム　／ヨドミ	▲－△－－－●○○－－－－○－○－－▲
27	ツズル　／ツズリ	÷÷÷○÷÷●÷△●÷÷÷●÷●÷÷○
28	ツムグ　／ツムギ	△－○－○－－－○－－－－－▲－－－▲
29	エズケル／エズケ	÷－－－－－●－－△－△－－－●－－●
30	ホコル　／ホコリ	－－－－－－－－○－－－▲－－－－▲△

４拍名詞

1	ウッタエル／ウッタエ	●●●－●●●●●●●▲－●●●△●△
2	タクワエル／タクワエ	●●●●●▲●●●●▲●－●▲●－○▲
3	アツラエル／アツラエ	－－▲－●－●●－●●●●●●●●●●
4	ワキマエル／ワキマエ	－－▲▲●－●●▲－－●▲－－●－－▲
5	ツブヤク　／ツブヤキ	－－▲－－－－●－－－●－▲●●－▲△
6	チカズク　／チカズキ	○－△－△－－△○－－○－－－○－△－
7	サゲスム　／サゲスミ	○－－－－－●▲○－▲▲－－▲－－－▲
8	ササヤク　／ササヤキ	－－－▲◎－●▲△－－－－●●÷－－△

表５（右）

３拍名詞

1	オサエル／オサエ	手を押える。19-348／押さえが利かない。4-440
2	コタエル／コタエ	疑問に答える。20-240／答えを間違える。20-239
3	ソナエル／ソナエ	有事に備える。21-195／備えを固める。11-335
4	イカル　／イカリ	怒る。3-1 ／怒りが爆発する。2-600
5	モツレル／モツレ	糸が縺れる。17-582／金銭関係の縺れで…。17-583
6	ツカエル／ツカエ	喉がつかえる。21-416／胸の痞が下りた。12-459
7	ナノル　／ナノリ	名を名乗る。14-95 ／名乗りを上げる。14-94
8	ムクム　／ムクミ	足がむくむ。17-361／むくみが来る。17-362
9	アカス　／アカシ	身の潔白を証す。2-94／証を立てる。2-90
10	マツル　／マツリ	神を祭る。17-80 ／祭りが始まる。17-77
11	オーウ　／オーイ	覆う。4-322 ／覆いを取り払う。4-320
12	サカエル／サカエ	国が栄える。20-307／国の栄えを祈願する。8-450
13	イタル　／イタリ	困難な状況に至る。3-167 ／光栄の至りです。3-165
14	イサメル／イサメ	諌める。3-97／人の諌めを聞き入れる。19-118
15	コナレル／コナレ	8-224 ／こなれが悪い。8-225
16	ムクイル／ムクイ	恩に報いる。17-359／報いを受ける。17-358
17	チカウ　／チカイ	12-204／誓いを立てる。12-203
18	ユガム　／ユガミ	ネクタイが歪む。18-198／歪を正す。23-203
19	ノロケル／ノロケ	手放しでのろける。22-188／惚気を聞かされる。14-470
20	サグル　／サグリ	8-485 ／探りを入れる。20-312
21	ツタエル／ツタエ	12-531／昔の伝えがある。21-436
22	コナス　／コナシ	8-220 ／軽い身のこなしだ。20-258
23	シメス　／シメシ	手本を示す。20-605／示しがつかない。9-416
24	ツボム　／ツボミ	花が蕾む。12-582／蕾がたくさんついている。12-581
25	ユルグ　／ユルギ	信念が揺るぐ。23-220／揺るぎがない地位。23-219
26	ヨドム　／ヨドミ	水が澱む。18-333／澱がない話し方。18-332
27	ツズル　／ツズリ	12-557／英語の綴りが違っている。12-555
28	ツムグ　／ツムギ	12-596／紬を織る。12-595
29	エズケル／エズケ	猿を餌づける。1-52／餌付けに成功する。1-51
30	ホコル　／ホコリ	才能を誇る。22-565／誇りを持つ。16-423

４拍名詞

1	ウッタエル／ウッタエ	訴える。4-108 ／訴えを聞く。4-110
2	タクワエル／タクワエ	11-524／蓄えが底をつく。11-523
3	アツラエル／アツラエ	洋服を誂える。19-54 ／誂えに出す。2-309
4	ワキマエル／ワキマエ	時と場所をわきまえる。23-333／弁えがない。18-611
5	ツブヤク　／ツブヤキ	不平を呟く。21-441／呟きが聞こえる。12-574
6	チカズク　／チカズキ	12-213／近づきになる。21-346
7	サゲスム　／サゲスミ	相手を蔑む。20-315／蔑みを顔に表わす。8-487
8	ササヤク　／ササヤキ	耳元で囁く。20-320／囁きが聞える。8-495

9	オトズレル／オトズレ	−▲−−−○−−●−−÷−●▲●−−▲
10	ヨソオウ　／ヨソオイ	○−−−−−−−○−−●−△−▲−−○
11	アジワウ　／アジワイ	−−−−−−△−△△−−−○−●○−−
12	ホドコス　／ホドコシ	−−−−−−−−○−−●−▲−−−◎○
13	カカワル　／カカワリ	△−−−−−−−−−−−−−●▲●−−△
14	サマタゲル／サマタゲ	−−−−▲−−−△−−▲−▲−▲−−−
15	ナグサメル／ナグサメ	−−−−−−−−−−−−−−−▲○−−
16	イマシメル／イマシメ	−−−−−−−−−−−△−△−−−−−

5.2.　3拍語と4拍語の比較

データの数がやや少ないかもしれないが，総体的な式の保持のあり方をみるために，5.1.に示した3分類に従ってそれぞれの百分率を出し，3拍語と4拍語を対比させたのが，図6である。

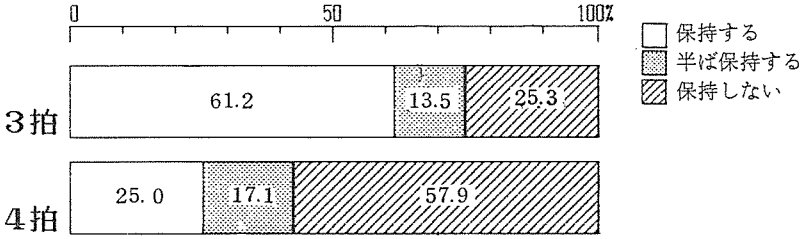

図6　式の保持率の比較

「(1)式を保持する」は，3拍語が61.2%，4拍語が25.0%と，両者にはかなりの開きがある。これに，「(2)半ば式を保持する」を加えると，3拍語が74.7%，4拍語が42.1%で，3拍語と4拍語の平均は58.4%となる。これらは，4.3.で求めた起伏式の保持率，3拍語72.6%，4拍語36.6%，3拍語と4拍語の平均54.6%をいずれも若干上回るものの，きわめて近い数字になっている。

9	オトズレル／オトズレ	訪れる。4-543 ／人の訪れを待つ。4-542
10	ヨソオウ　／ヨソオイ	派手に装う。18-315／装いを改める。18-314
11	アジワウ　／アジワイ	味わう。2-246 ／味わいが深い。19-40
12	ホドコス　／ホドコシ	面目を施す。16-466／施しをする。16-467
13	カカワル　／カカワリ	経営に関わる。19-424／深い関わりを持つ。19-423
14	サマタゲル／サマタゲ	8-589 ／修行の妨げとなる。8-590
15	ナグサメル／ナグサメ	失意の友を慰める。14-39 ／慰めにもならない。22-71
16	イマシメル／イマシメ	戒める。3-375 ／親の戒めを守る。19-199

このことから，今回の対象データにおける平板式の保持をも加えた総体的な式の保持の割合は，3拍語が7割程度，4拍語が4割程度とみて，おおむね間違いないように思われる。

その他，表5の3拍語と4拍語を比較して特に目につくことは，3拍語の「(3)式を保持しない」の中に，動詞が平板式で転成名詞が起伏式というペア（つまり「÷」の記号）がかなり多数みられる点である。これは，4拍語にはわずかに2例しかみられない。

例えば「27ツズル／ツズリ」のペアでは，最も多く12人にこれが現れる。このやや変則的なペアは，おそらく次のような(1)から(3)への変化の過渡期(2)に位置するものと推定される。

(1)　ツズ’ル　↔　ツズリ’

(2)　ツズル　↔　ツズリ’

(3)　ツズル　↔　ツズリ

この(2)は，動詞と転成名詞がともに起伏式で，式が保持されている(1)の段階から，動詞の方に平板化が起こって生まれたものと考えられる。(2)の段階で，さらに転成名詞が動詞に合わせて式を保持しようとすれば(3)になり，ともに平板式で一応安定する。「24ツボム／ツボミ」も，おそらく同様の例と考えられる。

また，転成名詞の語末部の語音構造が，連母音「-アエ」であるものが，3拍語，4拍語とも「式を保持する」率が高く，上位の方に並んでいるのが目につく。

5.3.　インフォーマント間の比較

表5の「(1)式を保持する」(つまり●+○)について，インフォーマントごとに出現率を計算し，結果を3拍語，4拍語，3拍語と4拍語の平均に分けて，グラフ化したものが図7である。

図7の描くジグザグ模様から，インフォーマントによって，式の保持の仕方に相当の違いがある様子がよく分かる。ｉ氏やｌ氏のように，3拍語と4拍語の間にほとんど差がない人もいれば，Ｊ氏のように50%以上の差がある人もいる。ｉ氏とＪ氏は，平均するとほとんど近い数値になってしまうが，実際の保持の仕方は，まったくタイプを異にしている。

また，ここでもＰ氏が，3拍語，4拍語ともに安定した高い率を示しているのが目をひく。4.3.の結果と合わせ考えると，式の保持率の高さという点において，このＰ氏はアクセントの保守性を示す典型的な人物と言えそうである。

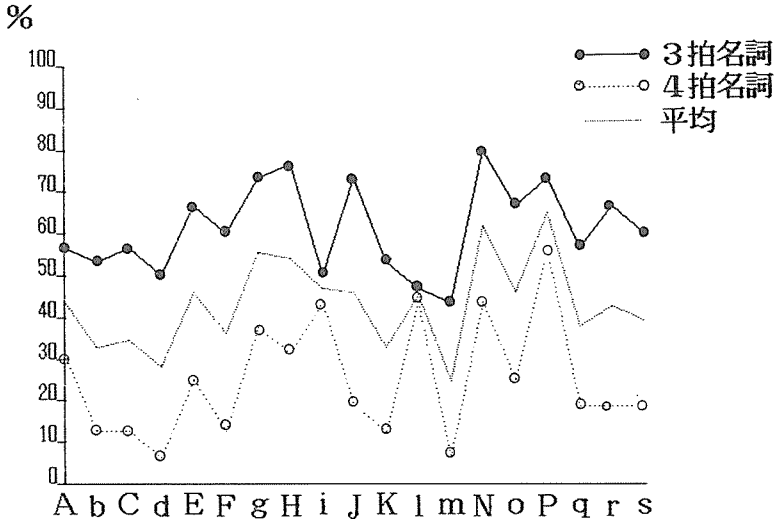

図7　インフォーマント別の式の保持率

6．おわりに

本稿では，アクセント規則が「生きている」とはどういうことか，という主題をめぐって，まず，その規則が関わる造語パターンの生産力を問題にすべきことを指摘し，若干の原理的考察を行った（第1章，第2章）。次に，一つの事例研究として，動詞からの転成名詞のアクセントにみられる「式の保持」の問題を取り上げた。具体的には『東京語アクセント資料』から得たデータにもとづいて，既成の転成名詞を中心に式の保持の実態を社会言語学的に把握し，それに関与していると思われる諸要因の分析を行った（第3章，第4章，第5章）。

川上蓁（1973）の「今日の人が必要に応じて任意の動詞から名詞を転成するときに働く」規則であるという指摘は，この規則が生きていることを主張するための要件としては，一つの側面しか捉えていないように思われる。問題は，やはりこの転成名詞派生パターンの，今日の現実における生産力の高さであろう。必要に応じて任意の動詞から名詞を転成することが，実際にどれくらい行われているのか，あるいは行われうるのか，計量的に把捉する方法を開発することが大きな課題として残されている。[注15]

今日われわれが使っている転成名詞は，おそらくその大部分が前の時代から伝承されてきたものであろう。本稿では，その伝承的アクセントが，式の保持のようなアクセントの規則的な側面と，実際にどのように折り合いをつけているのか，その実態の一端を明らかにすることができたと思う。

『東京ア』に掲載される，起伏式単純動詞からの転成名詞について，式の保持という観点から検討した結果，3拍語は比較的起伏式をよく保持しているのに対して，4拍語はかなり平板式に変わりつつあることが判明した。それでは，3拍語と4拍語とで，なぜこのような明らかな差が生じているのであろうか。現代東京語のアクセント現象において，例えば短い単語と長い単語を分かつ有意味な境界が，3拍語と4拍語の間に存在するのではないかとも推測される。今後とも，3拍語と4拍語のアクセント上の振舞いの違いについて，様々な角度から検討を試みなければならない。

本稿では，転成名詞の式の保持の問題を考察の中心にすえたため，より具体的な型のレベルの問題については，ほとんど触れることがなかった。このことは，型のレベルの区別が重要でないということを全く意味しない。むしろ，型のレベルの区別と式のレベルの区別とが，それぞれに分担している機能・役割という観点から，意識的にアクセント現象全体を眺め直してみることの必要性を強く感ずるものである。

注

1) アクセント規則について，それが今日「生きている」かどうか，という観点から有用性を論じたものに川上蓁（1973）がある。本稿は，この観点を引き継ぐと同時に，「生きている」ということの内容を，さらに吟味しようとするものである。

2) アクセント研究における「式」という用語については，別の用法もあるので注意が必要である。「京阪式，東京式，一型式」という伝統的な三類型の場合の他に，例えば，京都アクセント等について言う「高起式，低起式」の区別の場合がある。後者の「式」の概念をさらに一般化し，それに重点をおいて日本語諸方言のアクセントタイプの共時的分類を試みたものに，上野善道（1989）がある。いずれも，ここでの式の用法とは別個のものである。なお，後者では当然「式保存の法則」が問題にされようが，それとの混同を避けるために，ここでは「式の保持」「式を保持する」と呼ぶことにした。

3) 「～方」という接尾辞のもつ生産力，あるいはその付加を制約する諸要因については，井上優（1990）を参照。

4) 型のレベルの区別については，東京語アクセントにおける，いわゆるＡ型Ｂ型の問題も絡むので，実際には「尾高型になる」と単純に断定することはできない。この問題については，相澤正夫（1984）を参照。

5) 『明解ア』の「アクセント習得法則」95，Ｉ，注④に，「「…方（方法）」は前部の語が平板式ならば平板式，起伏式ならば尾高型と，後から二拍めまで高い中高型の傾向がある。」とある。

6) 川上蓁（1973），p.64の記述による。但し、この一文は、意味的に仮定節を含んでいると解釈すべきであろう。すなわち、「今日の人が必要に応じて任意の動詞から名詞を転成するとすれば、そのときに働くのがこの規則である」と読むのが妥当と思われる。

7) 一般に，ある規則を「今日生きている規則」と呼ぶための要件として，規則自体の十全性の他に，十分な適用機会の確保ということがあると思われる。どんなに優れた道具（潜在能力）も，それを利用する絶対回数（活性化環境）に恵まれなければ，結局生かされえないのと同じである。

8) 佐藤亮一（1990），p.206参照。『東京ア』の調査語に選定されなかった語が，現実の19人アクセントで斉一であるという保証はどこにもない。調査語に選定された語と比較すれば、相対的に斉一性の高いことが仮定できる，というくらいの意味に理解すべきである。

9) 仮りに20人のインフォーマントが自由に選べるとしたら，五つの年齢層に分け，各年齢層の４人を，山の手の男女と下町の男女に配分するのが理想であろう。

10) 『東京ア』には，調査時における読み上げ文は掲載されていない。本稿に情報とし

て示すことができたのは，筆者が調査者の一人としてこの調査に参加していたことによる。(i)の調査票に関する情報の提示についても，同じ事情による。

11) 以下，数量的な処理をするにあたり，転成名詞と認定する基準をきびしくすることにした。単純動詞とその転成名詞という条件を守るためである。次の①～③に該当する単語を，筆者の判断によって除外した。(3拍語で10語，4拍語で17語)

① もとの動詞の使用が稀なもの。

② もとの動詞との意味的関係が希薄なもの。

③ 単純語と意識しにくいもの。

①②については「＊」，③については「井」を通し番号に付した。結局，3拍語は42語，4拍語は74語が集計の対象となっている。ちなみに，「井」を付したもののうち「ハバタキ」「キズカイ」「ミガマエ」のアクセント型をみると，「ハバ’タキ」のインフォーマントが15名，「キズ’カイ」が16名，「ミガ’マエ」が10名いる。これらのアクセントが，「ハ・バタキ」「キ・ズカイ」「ミ・ガマエ」という複合語意識にもとづき，複合語アクセント規則によって付与されたことは明らかである。

12) 『東京ア』がゆれの予想される語だけを扱っている点を考えると，ゆれていない語までも対象とすれば，起伏式を保持する率がその分かなり上がると予測される。そこで，『東京ア』にない転成名詞について小調査を行った。手順は次の通り。

① 国立国語研究所（1971）の巻末リストにある単純動詞約1,900語について，4種の辞書にその転成名詞アクセントが載っているかどうかを調べる。

② 4種の辞書全てに，単純動詞とその転成名詞のアクセントが載っている場合に，そのペアをアクセント情報とともに抜き出す。

③ ②の結果から単純動詞に平板式の記載が一切ないものを抜き出す。

④ ③の結果からさらに転成名詞にも平板式の記載が一切ないものを抜き出す。

③④の結果から『東京ア』と重複する転成名詞を除き，③／④の形式で示すと，3拍語が120語／112語，4拍語が10語／4語となる。辞書の情報の範囲で言えば，3拍語は，112語が完全に起伏式を保持し，8語が平板式を出現させるのに対し，4拍語は，4語が完全に起伏式を保持し，6語が平板式を出現させることになる。仮りにこれらの語を追加したとき，3拍語では起伏式の保持率が大幅に上がると予測されるのに対し，4拍語ではほとんど変動がおこらないと思われる。

13) 4種の辞書全てに頭高型アクセントの記載がある3拍転成名詞を次に列挙する。

オロシ（卸），カカリ（係），サガリ（力士の），サワギ（騒），シマリ（のない），タタリ（祟），タヨリ（になる），ドモリ（吃），ナガシ（タクシー），ハジキ（ピストル），ハナレ（屋敷），フブキ（吹雪），マグレ（幸運），モグリ（無認可）

14) 動詞項目の読み上げ文は，実際の調査では次のような二つの文を順に読んでもらうのが原則であった。

①「手を押える。」のような（多くの場合）ごく簡単な文脈付きの文。

②「押えるということは押えることだ。」のように，「～するということは～することだ。」という枠に動詞を挿入した文。

但し，①を省略した動詞もある。表5の右ページに読み上げ文が載っていない動詞がそうである。本稿では，このような事情もあって，②の文の後半の「～することだ」の部分に現れる動詞アクセントの式を採用した。

15）例えば「水のナガレが悪い」「声のトドキが悪い」「電話のカカリが悪い」のように，動作などの行われる様子・具合について言う場合の生産力は，かなり高いと思われる。しかし，これも「水のナガレ方」「水のナガレ具合」など「～方」「～具合」に比べれば，自由な生産力がかなり落ちるのではないか。また、元の動詞より意味が狭く限定され，語によってはジャーゴン的なニュアンスも感じられる。

参考文献（著者名の五十音順）

相澤正夫（1984）「東京方言アクセントにおける尾高型から非尾高型への移行―いわゆるA型B型のゆれをどう捉えるか―」『日本方言研究会第３８回研究発表会発表原稿集』

――――（1987）「アクセントの機能についての覚え書」『言語学の視界』（小泉保教授還暦記念論文集）大学書林

秋永一枝（1957）「アクセント推移の要因について」『国語学』31

井上　優（1990）「接尾辞「～方」について」『日本語学』９-11

上野善道（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育　２　日本語の音声・音韻（上）』明治書院

川上　蓁（1973）「動詞からの転成名詞のアクセント」『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社

日下部文夫（1969）「アクセントと文法」『月刊文法』２-１

国立国語研究所（1971）『動詞・形容詞問題語用例集』（国立国語研究所資料集　７）

佐藤亮一（1989）「東京語音声分析の問題　－単語アクセントを中心に－」『日本語学』８-３

――――（1990）「現代東京語のアクセント－年齢差および辞典との差を中心に－」『国語論究　２　文字・音韻の研究』明治書院

西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43（『現代語彙の研究』（1988）明治書院に再録）

馬瀬良雄・佐藤亮一（1989）「東京語アクセントの多様性」『講座日本語と日本語教育　２　日本語の音声・音韻（上）』明治書院

三井はるみ（1989）「東京語における三拍和語のアクセント変化」『文芸研究』121
三宅武郎（1934）『音声口語法』（国語科学講座　Ⅵ　国語法）明治書院
村木新次郎（1980）「日本語の機能動詞表現をめぐって」『研究報告集』2（国立国語研究所報告　65）
――――――（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4－1

資料集・辞典類（見出しは本稿での略称）

『東京ア』：『東京語アクセント資料　上・下』（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）　柴田　武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）
『新明解』：『新明解国語辞典　第３版』(第１刷)　金田一京助ほか編（1981）三省堂
『ＮＨＫ』：『日本語発音アクセント辞典』(第15刷)　日本放送協会編（1974）日本放送出版協会
『明解ア』：『明解日本語アクセント辞典　第２版』（第１刷）　金田一春彦監修，秋永一枝編（1981）三省堂
『全国ア』：『全国アクセント辞典』（第20版）　平山輝男編（1979）東京堂出版

［付記］
本稿は，国立国語研究所の研究部会議（1990年９月19日）で行った同じ題目の研究発表にもとづいている。同僚諸氏の指摘により，内容を改めたところも多い。記して感謝の意を表する。
また，末尾ながら，『東京語アクセント資料』の作成に関わられた全ての方々に，改めてお礼を申し上げる。苦労の末に成ったせっかくの資料集である。今後とも有効に活用させていただきたく思う。